

■今月の特選句

2014年11月号

骨だけとなりてかなしきいわし雲

小泉花子

滑稽句は、発想が勝負。「骨だけ」のだけで花子さんは勝利した。骨組みだけの虹の橋、ダイエット中の峰雲とか…、ううん、イマイチだなあ。

死角なき防犯カメラ文化の日

飯塚ひろし

防犯カメラに監視されている私達に、プライバシーは無い。息苦しい。そこで提案します。「防犯カメラに死角をつくれ文化の日」。

姥捨へ行く心地して敬老会

横山喜三郎

滑稽俳句を作る人は、精神年齢が若い。敬老会に参加したら老人を装ってください。姥捨会に行くなどと口をすべらしてはなりませんよ。

金塊を掘り出す如く栗ごはん

久我正明

穿って食べるというのは古典的な表現だが、金塊に例えたところが巧み。俳句は感じる脳味噌と考える脳味噌つくる。そこが味噌なんですよ。

をりとれぬすすきにごふをにやしけり

田村米生

蛇笏先生は、「をりとりて」として作句した。俳句は空想で作るものだから、時として、不可能が可能となり、名句として後世に残る。

小芋メをつひに刺したり箸の先

新島里子

小芋を相手に奮闘してお疲れさま。ドンキホーテみたいだね。「つひに刺したり箸の先」、ここでファンファーレを鳴らしてあげたい。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

- | | |
|-------------------------------------|-------|
| 敬老日下心あるゴマ播られ
・・・遺産相続額のちらちら | 青木輝子 |
| 父ちゃんも来て欲しかった運動会
・・・走るが遅い子どもだけれど | 大澤酒仙奴 |
| 加齢とは実は引き算敬老日
・・・ゼロになつたら心肺停止 | 麻生やよひ |
| 密談や秋扇のまた開きたる
・・・扇の陰に口を寄せたり | 加藤 賢 |
| 鉦叩とリズムが合ってねむくなる
・・・念仏講の思い出されて | 川島智子 |
| 新米を褒め新米をどやしつけ
・・・米をおだてて人間貶す | 有吉堅二 |
| これと云ふ不満とてなし栗をむく
・・・梨剥くときも同じ心地か | 稲沢進一 |
| 秋茄子食わせてみたし嫁探す
・・・孫の顔見ることが念願 | 井野ひろみ |
| 実を言ふと目黒のさんま宮古産
・・・明石家さんま和歌山産よ | 小川鈍太 |
| 松手入首懸けによき仕上げかな
・・・ちょっと試してみたい気もする | 金澤 健 |

花野かと盗人萩にたばかられ

・・・ぬすびとだとて美しきものかは

佐野萬里子

時流には乗れぬ一徹柘榴の実

・・・はらわた見せて隠し事なし

百千草

椋鳥の群れて上下はなかりけり

・・・上下争い決着つかず

井口夏子

■今月の滑稽句

- | | | |
|------|---------------------------------------------------|----------------------|
| 【佳作】 | ああ言えばこう言うかかあいぼむしり
うそ寒し満員御礼養老院 | 青木輝子
青木輝子 |
| 【佳作】 | 上弦は星追ふ月のかたちにて
帯留のさまで籬に烏瓜
風流より実利大事と茸採る | 青山桂一
青山桂一
青山桂一 |
| 【佳作】 | 草の花土砂崩れても咲きつづく
身に入むや納戸の整理何度でも
霧晴れて山の稜線生めかし | 秋月裕子
秋月裕子
秋月裕子 |
| 【佳作】 | 長ずれどまだ頼りなし弟切草
またしても遊び呆けて穴惑ひ | 麻生やよひ
麻生やよひ |
| 【佳作】 | 胸張って改札通る赤い羽根
秋刀魚焼く匂ひに目覚む路地の猫 | 有吉堅二
有吉堅二 |
| 【佳作】 | タブレットスマホガラケー七五三
小春日や赤子の陰が這って伸び
母子とも同じ漫画や秋日和 | 粟倉健二
粟倉健二
粟倉健二 |
| 【佳作】 | 谷底へ転げ落ちたる竜田姫
縁談が松茸一荷提げて来る | 飯塚ひろし
飯塚ひろし |
| 【佳作】 | 運動会形相変はるリレーかな
ゆれかはしめてコスモス太ることもなし | 井口夏子
井口夏子 |
| 【佳作】 | 枯れすすきに寄り添う気まぐれ女郎花
女神輿化粧くずれの色模様 | 池田亮二
池田亮二 |
| 【佳作】 | 庭一面落ち葉でもいます寝ています
ノーベル賞皮算用して新ばしり | 石川セツコ
石川セツコ |
| 【佳作】 | 紅あかと八十路祝うか彼岸花
裏庭へ迎えに来たか彼岸花
チョロチョロと小さき家守孫にせん | 伊藤慈秀
伊藤慈秀
伊藤慈秀 |
| 【佳作】 | 似てさうで実は似てない萩と萩
米余りもって頑張れ稲雀
秋津島揺れて蓑虫揺れもせず | 伊藤浩睦
伊藤浩睦
伊藤浩睦 |
| | 天高し日本アルプス従ひぬ | 稲沢進一 |

【佳作】	天高し血压計の正常値	稲沢進一
【佳作】	夕月夜思い出したる忘れ事	井野ひろみ
	遠雷と聞き違えるたる放屁かな	入江澄泉
	青蜥蜴夜逃げの如く消え失せり	入江澄泉
【佳作】	デング熱やぶ蚊を避ける厚化粧	入江澄泉
【佳作】	ネコの尾のうちわにしたきほどの揺れ	上山美穂
	お金持ちファッションオレンジの金魚姫	上山美穂
	恋ふ人の月におるなりかぐや姫	上山美穂
	鯛焼を尻尾から食ふ銀行員	氏家頼一
【佳作】	老残の桐の一葉のしがみつく	氏家頼一
	団栗の落ちたばかりに聞いて見る	氏家頼一
	艶やかにあれど山梔子口開かず	梅岡菊子
【佳作】	このあたりリスのなわばり木の実ふる	梅岡菊子
	あらくれに混じりなでしこ神輿かな	梅岡菊子
【佳作】	神の留守妻の入らぬ部屋の欲し	越前春生
	秋彼岸犬の戒名長かりし	越前春生
	秋刀魚焼く外階段に子の泣いて	越前春生
【佳作】	釣り人のつむり搔き搔き茸など	大澤酒仙奴
	蚯蚓鳴く聞きたきや御出で八街へ	小川鈍太
【佳作】	台風の日本好きは神代から	小川鈍太
	串だんご甘辛合はせて十三夜	奥脇弘久
	コスモスや勝手気ままに風に乗る	奥脇弘久
【佳作】	宵闇の世界を照らすダイオード	奥脇弘久
【佳作】	包丁の出刃に噛みつく大南瓜	笠 政人
	草の実を夕餉の雀舌つづみ	笠 政人
	鹿寄せのホルンに人も集り来	笠 政人
【佳作】	縁先にばばの居坐る松手入	加藤 賢
	運動会フォークダンスの手を握る	加藤 賢
	谷上山松前辺りは豊の秋	門屋 定
	天高し小枝揺らして松手入れ	門屋 定
【佳作】	犬を飼い揉める家有り敬老日	門屋 定

【佳作】	鳴立ちて跡濁しけり沢の暮 やましくもないのに小声夜学生	金澤 健 金澤 健
【佳作】	仏壇の中で鳴いてる鉦叩 敬老の日一票得んとうやまいぬ	川島智子 川島智子
【佳作】	家事雑事全部お任せ今日の月 家計簿を覗いてゆきし秋の風 秋風や弱音の混じるお説教	菅野あたる 菅野あたる 菅野あたる
【佳作】	空蝉や至急入居者募集中 太る腹痩せる給料爽やかに	久我正明 久我正明
【佳作】	みのこづちつけて太鼓を叩きをり 丸窓に四角の木柶障子貼る 断捨離の決意揺らぎて酔芙蓉	工藤泰子 工藤泰子 工藤泰子
【佳作】	「赤い羽根」届きて募金避けられず 歯一本在ればリンゴを丸かじり	黒田忠一 黒田忠一
【佳作】	デコのシミ又一つふえ夏終わる 葉も落ちて隠しようなき薔薇の棘	小泉花子 小泉花子
【佳作】	極楽のツアーとんぼの添乗員 狛犬に呑めとからみしにごり酒 秋の蛇エデンの園をうろつきぬ	小林英昭 小林英昭 小林英昭
【佳作】	柔道は剛道と化し道をしへ 大相撲モンゴル場所となりにけり 敬老てふ姥捨山や敬老日	酒井鹿洋 酒井鹿洋 酒井鹿洋
【佳作】	コスモスよ見つめられては頬染める 色づく葉色めく人も散りゆくの 頑固さんその一徹が時代おくれ	佐藤義子 佐藤義子 佐藤義子
【佳作】	敬老の日子や孫にやる野菜かな 秋分は庭草取りに暮れにけり	佐野萬里子 佐野萬里子
【佳作】	松茸飯聞こえよがしに舌鼓 夜寒しスマホを愛撫してる妻 ひとりでは動けぬ我と台風と	下嶋四万歩 下嶋四万歩 下嶋四万歩
【佳作】	新涼のおみどにひやり便座かな 新走り魔術の聞き出す噂かな	壽命秀次 壽命秀次

	秋の蚊に見向きもされぬ瘦身なり	壽命秀次
【佳作】	秋扇閉ぢて開いて長考す 水底に小銭あまたや水澄めり 末席を汚して正座敬老会	白井道義 白井道義 白井道義
【佳作】	私がうなづくまで百舌は鳴く よく笑う百舌だ 私の大根畑 気高い声の百舌ようそが上手	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
【佳作】	肌寒くきのうのお肉ラーメンに 秋深しおおめヤキソバ目玉焼 秋の朝缶づめおかずサラダ盛り	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
【佳作】	今日も又女敵討や菊人形 竜田姫御色直しの派手なこと 屁放虫美人女将のご愛敬	高田敏男 高田敏男 高田敏男
【佳作】	神在月スタバもありて大社かな 電車ではガラケイそつと秋の暮 瓢の実や楽と淋しは正比例	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
【佳作】	案山子かと野良着の男の袖を引く お道化たる案山子に見える孤独かな 疲れ果て拳句の火あぶり捨案山子	高橋素子 高橋素子 高橋素子
【佳作】	鶏の背のびし眺む花鶏頭 夕暮の風離さずに秋ざくら 遠き野の銀の波なり花すすき	田中章子 田中章子 田中章子
【佳作】	ひやとひの小説を書く星河かな 秋の灯の飛田新地のエロスかな さまざまな想ひの巡る虫の宿	田中 勇 田中 勇 田中 勇
【佳作】	二人居に貰ふ南瓜のこれはこれは 百足打つ空き手は祈る形して 嫁御古り播粉木も古りとろろ汁	田中早苗 田中早苗 田中早苗
【佳作】	猫じやらし猫じやらすこと飽きにけり 運動会借り物の婆激走す	田村米生 田村米生
【佳作】	秋晴れやデイケアバスがお迎えに ベランダの干し柿いつか数が減り フラメンコ国が違えば盆踊り	津田このみ 津田このみ 津田このみ

	大海を知らぬ阿呆や南州忌 ヘルニアはきつとハレルヤ秋刀魚焼く	土屋泰山 土屋泰山 土屋泰山
【佳作】	新米の粘りにたじろぐアンパンマン	
	秋日和眠ったふりの優先席 秋祭り神も召されし二日酔	都吐夢 都吐夢 都吐夢
【佳作】	詩人には成れず只管秋刀魚食う	
	何時来ても大往生てふ敬老日 色違へ一日が一世酔芙蓉	飛田正勝 飛田正勝 飛田正勝
【佳作】	新酒利き正論を吐く天邪鬼	
	図書館の帰りに気づく帰り花 神の留守御神酒なれども盗み呑む	永島董玉 永島董玉 永島董玉
【佳作】	眠る山眠らぬ山は火を吐きて	
	栗飯にありつかんとて栗をむく 栗の皮ひんむく口をひん曲げて	新島里子 新島里子
【佳作】		
	秋の夜のLEDの輝きて カンバスに色無き風の描き切れず	西をさむ 西をさむ 西をさむ
【佳作】	赤い羽根着けて潜れる焼鳥屋	
	満月や地球に食われたこ焼きに 父と採るあけび今では高値の実	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
【佳作】	彼岸花地中で季節キャッチの術	
	アマゾンからセールメール出水中 えのころやスコットランドどころぶ	原田 曄 原田 曄 原田 曄
【佳作】	ヤバイてふ言の葉ヤバキ縞蚊かな	
	台風の時速誰にも褒められず 鳥食みもエネルギー要る生身魂	ひがし愛 ひがし愛 ひがし愛
【佳作】	寄居虫が豪華な家をもて余す	
	蟻だけが列席したる蟬の葬 村中の噂知ったる木守柿	久松久子 久松久子 久松久子
【佳作】	竹箒落葉に舵を取られをり	
	ろうそくの火や秋の灯として揺るる 夜長なり小指を立ててお紅茶を	日根野聖子 日根野聖子 日根野聖子
【佳作】	柚道に標識あらず草紅葉	

【佳作】	門被き松にひと日の手入れ代 飼猫の一と声に外の後の月 青蜜柑皮やわらかに触れにけり	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
【佳作】	高齢化ぐんぐん進む夜ぞ長し 長き夜や話せば分かるとは言へど 秋ばてがありそのあとにある秋思	藤森荘吉 藤森荘吉 藤森荘吉
【佳作】	過ぎたるは騒音となり虫時雨 空気鎮ませ秋光の高野山 通勤の傘台風に抗へず	藤原セツ子 藤原セツ子 藤原セツ子
【佳作】	名月や団子は旨し酒甘露 神の旅我れ留守番で頼り無し 一月のヴァケーションかよ神の旅	細川岩男 細川岩男 細川岩男
【佳作】	まあだだよ稲穂をゆらし逃げる猫 丹波栗中山栗と届きけり 味噌汁をきりりとしめる茗荷花	松井寿子 松井寿子 松井寿子
【佳作】	秋風鈴に尾行(つけ)られてをりストーカー 胡散臭い家主の木犀よく匂ふ 痴話喧嘩浴びてしまへり曼珠沙華	松井まさし 松井まさし 松井まさし
【佳作】	季のせめぐ積雲の上翳雲 アジア五輪GNPに比すメダル 秋深し隣りに潜む狂ふ人	丸山紘一 丸山紘一 丸山紘一
【佳作】	携帯わすれ陸の孤島のわたし 天守閣より声の落ち来る秋日なか じじばばもアンパンマンや秋の庭	三橋百笑 三橋百笑 三橋百笑
【佳作】	露座仏の掌にある水に小鳥来る 朝鳴や老僧壺の如く座す 誰それのうはさ話や長き夜	宮森 輝 宮森 輝 宮森 輝
【佳作】	凡人の性詰め放題の青蜜柑 サインして死はずつと先ななかまど	百千草 百千草
【佳作】	取り入れた洗濯物にへこき虫 爪後に鬼の詣でや台風目 満月や三人のノーベル賞	森岡香代子 森岡香代子 森岡香代子
	秋口に必要な花芙蓉かな	森 要

【佳作】	誰が声かバナナうまいし松茸も 青い空小金の波に赤トンボ	森 要 森 要
【佳作】	菊人形に大見得切らせ落選す 初耳にあらむ初茸の登場は 傾けるものに蒨蓄新走	八木 健 八木 健 八木 健
【佳作】	代ゼミなる予備校ありき夜蝉かな 曼珠沙華真つ赤な嘘に赤つ恥 敬老日振り込め詐欺に気を付けよ	八洲忙閑 八洲忙閑 八洲忙閑
【佳作】	新米や小町の肌のかぐわしき 小町にも賞味期限や今年米 足跡の汚れも誉れ月祀る	柳 紅生 柳 紅生 柳 紅生
【佳作】	葛の花見抜きてをりぬ小さき嘘 手ぎわよくくるくる廻る栗料理 聖書読む神の作品神無月	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
【佳作】	捨て置けぬ敬老の日の眉白髪 風に知るひと恋しきのけふの秋 夕月夜店のだんごは神隠し	山下正純 山下正純 山下正純
【佳作】	黙黙やバナナアイスが歩かせる 蝗串に追ひかけられる奇声かな ポケットに焼米のある薪拾ひ	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	放任の庭の朝顔満開に 錆色の新品種なり秋桜 来て見れば芒の中に遺跡かな	山本 賜 山本 賜 山本 賜
【佳作】	災害は忘れる間なし寅彦忌 敬老はたった一日あと軽老	横山喜三郎 横山喜三郎
【佳作】	こほろぎのシーツに光るベッドかな 太鼓腹馬肥ゆ程にあらねども 陽光に稲穂はゆれてさゞ波に	渡辺さだを 渡辺さだを 渡辺さだを